陳旧性釣り針食道異物例

三島 丈和・安藤 一郎・手塚 太一・西嶋 隆

A Case of Prolonged Presence of a Foreign Body (a Fishhook) in the Esophagus

Takekazu Mishima, Ichirou Andou, Taichi Tezuka and Takashi Nishijima
(Juntendou Urayasu Hospital)

This paper describes a 65-year-old male who presented with a condition involving the long-term presence of a foreign body, a fishhook, in the cervical esophagus. Apparently, the patient suffered severe and sudden pain in the throat while eating fish. He immediately visited the otolaryngological clinic and underwent a medical examination, however no remarkable findings were noted in the examination report. As the severity of the patient's pain gradually diminished, and his condition improved, no additional medical action was provided. Approximately one year later, a foreign body was discovered in the course of a cervical X-ray ordered by the orthopedics department. The patient then returned to our hospital, and a fish hook was successfully removed by esophagoscope under general anesthesia. An additional review of the prolonged presence esophageal foreign bodies was conducted in the present study. If the presence of an esophageal foreign body is suspected, in a patient, a cervical X-ray should be ordered to prevent overlooking this possibility in the first examination.

Key words : prolonged foreign body, fishhook, esophagus

はじめに

食道異物症例に関する検討は、現在までに多くの報告^{1)~4)}がある。代表的な食道異物として魚骨、幼児の硬貨、高齢者の義歯、最近では薬剤の PTP (press through pack) 異物などが知られている。今回我々は比較的まれな釣り針食道異物を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

症 例

患者：65歳、男性。

主訴：エックス線異常陰影。

既往歴：頸椎症のため昭和48年、前方固定術。昭和62年、脊柱管拡大術をうける。

現病歴：平成6年3月、魚を食べた直後から咽頭痛が

出現した。魚骨咽頭異物と考え近医耳鼻科を受診したが魚骨は発見されなかった。その後咽喉頭異物感は徐々に軽快し、咽頭痛も消失したためそのまま放置した。平成7年4月、頸椎症の定期検診のため整形外科受診し、頸部単純エックス線撮影にて、食道異物を指摘され当科紹介となった。

現症：咽喉頭に著変なく、全身状態も良好であった。

軟性ファイバー所見：来院時の食道ファイバー所見にて、門歯より約22 cm程の所に釣り針異物を確認した。周囲粘膜に、明らかな潰瘍形成、肉芽組織形成を認めなかった。

画像診断：来院時撮影した頸部単純エックス線写真を図1に示す。Th1の高さに針先を下方に向けた釣り針と思われる陰影を認めた。側面像では、膿瘍形成を疑わ

図1 頸部単純エックス線写真

胸椎の1番の高さに針先を下方に向けた釣り針と思われる陰影を認めた。気管後部軟部組織陰影の拡大所見は認めなかった。

せるような、気管後部軟部組織陰影の拡大所見を認めなかった。

血液検査：白血球数，血沈，CRP は正常であり，炎症所見を認めなかった。

治療：全身麻酔下で硬性食道鏡にて釣り針異物摘出を

行った。必要ならば食道外切開も考慮していたが，硬性鏡下に鉗子にて容易に摘出することができた。摘出した釣り針を図2に示す。長さ23 mmであった。

考 察

食道釣り針異物の頻度は，谷合ら¹⁾が，戦後の釣り針異物の例数が明記してある文献を集計し，食道異物1305例中12例(0.92%)を占めたと報告している。釣り針食道異物の報告例および自験例を検討した白幡ら²⁾は，釣り針異物の特徴として，釣り針異物が，食卓にのった魚を食べた時無意識に飲み込まれる事が多いこと，患者は魚骨をのどにひっかけたと訴える事が多いこと，釣り針のいわゆる“もどし”は鋭利で粘膜に刺入するとはずれにくいこと，嚥下する毎に深部に食い込み，摘出し難い異物となりやすいこと，を報告している。本例でも，食事の際摂取した魚に釣り針が残存しており，それを誤嚥したものと推定された。また“もどし”の部分が食道粘膜にささり，自然脱落しなかったと思われる。さらに白幡ら²⁾は，異物が長期間食道に放置されていると，食道壁の穿孔を起こし重篤な合併症を起こしやすいと考察して

図2 摘出した釣り針

長さ23 mm あった。

いる。谷合ら¹⁾も、釣り針異物から膿瘍を形成し、開胸にて救命しえた例を報告している。この症例では、釣り針が長期間食道に介在していたにもかかわらず重篤な合併症が出現しなかったのは幸いであつたと思われる。

木戸ら³⁾は12年間に経験した食道異物94例中66例が異物を誤嚥した当日病院を受診し、最長でも5日後には来院していることを報告している。さらに堤ら⁴⁾は、過去10年間に経験した食道異物30例すべてが、3日以内に摘出されたとしている。このように食道異物は、異物誤嚥後、1週間以内に摘出される事が多いようである。今回の例のように、異物の摘出までに1年以上を要している例はまれと思われる。本邦文献を著者らが渉猟したかぎりでは、摘出に1カ月以上を要した陳旧性食道異物は、16例報告されていたに過ぎない^{5)~18)}。自験例を含めたこれら陳旧性異物17例について検討した。図3に陳旧性食道異物報告例の来院時の主訴を示す。初診時、嚥下障害で来院する例が多かった。しかしエックス線撮影にて偶然異常陰影を指摘された例も本例を含め3例認められた。図4に陳旧性食道異物報告例の年齢分布を示す。0~4歳に多くみられ、他の年齢ではほぼ均等に発生していた。図5に陳旧性食道異物報告例の介在期間の分布を示す。大部分半年以内に摘出されていた。しかし最長で、8年後に摘出された例もみられた。表1に陳旧性食道異物報告例の異物の種類を示す。義歯が3例ある以外ばらばらで、いろいろな物が異物となっていた。しかし多くは、腐食しにくい物であり、一部に金属を含んでいる物が多くみられた。これらの金属は周囲組織との反応が少

図3 陳旧性食道異物報告例の来院時の主訴
嚥下障害で来院する例が多かった。

図4 陳旧性食道異物報告例の年齢分布
0~4歳に多くみられ、他の年齢ではほぼ均等に発生していた。

図5 陳旧性食道異物報告例の介在期間の分布
大部分半年以内に摘出されていた。

なく症状が軽いため、発見が遅れると考えられる。図6に陳旧性食道異物報告例の介在部位を示す。第2狭窄部に9例、以下第1狭窄部に4例、第3狭窄部に3例と第2狭窄部に一番多くみられた。一般に食道異物の多くは第1狭窄部位に存在するといわれているが、陳旧性食道異物はより深部に存在することが多いと思われる。

加納ら⁵⁾は異物が見逃される原因として1)異物の可能性を考えないこと、2)不十分な問診、3)病歴不明、4)異物存在の可能性を疑うこと(患者の言葉を信用しない)、5)医師の冷淡な態度、6)無症候の期間があること、7)異物の重複、8)誤診などをあげている。今回の症例は鉗子にて容易に摘出できたことから、食道粘膜の比較的浅い部分に釣り針が刺さっていたことが予想され

表 1 陳旧性食道異物報告例の異物の種類
多様な物が異物となっている。

異 物	例 数
義 歯	3
PTP	1
硬 貨	1
アルミニウム金具	1
種	1
安全ピン	1
プラスチック片	1
座 金	1
乾燥剤	1
咬合矯正器	1
カーテンフック	1
肉 片	1
ビニールチューブ	1
玩 具	1
釣 針	1

図 6 陳旧性食道異物報告例の介在部位
第2狭窄部に一番多くみられる。

る。そのため膿汁、潰瘍形成、肉芽形成を起こさず、嚥下障害などの症状が現れなかった事および、釣り針のいわゆる“もどし”のため、長期間食道に存在し、陳旧性異物となったのではないかと考えられる。さらに今回の症例が陳旧性異物となった原因として、初診医にて単純エックス線写真を撮影していなかったことが挙げられる。釣り針は単純エックス線写真にて明瞭に写り簡単に発見できる。我々の文献的考察の結果からも、陳旧性異物は腐食しにくく一部に金属を含むものが多い。異物の疑いのある場合、陳旧性異物を防ぐためにも、初診時の単純

エックス線撮影は是非必要であると思われる。単純エックス線写真の重要性を再認識させられた症例であった。

ま と め

1. 1年間放置され偶然発見された陳旧性釣り針食道異物症例を報告した。
2. 陳旧性食道異物について、文献的考察を加えた。
3. 異物の疑いのある場合、陳旧性異物を防ぐためにも、初診時の単純エックス線撮影は是非必要であると思われる。

稿を終えるにあたり、御校閲を賜りました恩師順天堂大学耳鼻咽喉科学教室、主任教授市川銀一郎先生に深謝致します。

本論文の要旨は第41回日本耳鼻咽喉科学会千葉県地方部会において講演した。

参考文献

- 1) 谷合 隆, 朝倉光司, 土居保幸, 他: 外切開を必要とした食道異物(釣り針)症例. 日気食会報 28 : 306~311, 1977.
- 2) 白幡雄一, 橋 敏郎, 深見雅也, 他: 食道釣り針異物症例. 耳展 29 : 165~170, 1986.
- 3) 木戸利成, 関谷 透, 野口高昭, 他: 当教室12年間の食道異物症の統計的観察. 耳展 34 : 325~334, 1991.
- 4) 堤康一郎, 戸田行雄, 飯田 順, 他: 当教室10年間の気道及び食道異物の臨床統計的観察. 耳鼻臨床 補9 : 59~65, 1987.
- 5) 加納光雄: 1カ月間嵌在せし食道異物症例. 耳喉 22 : 530~531, 1950.
- 6) 小野 譲, 斉藤成司, 三宅広郷: 気道及び食道の異物. 日気食会報 10 : 91~132, 1959.
- 7) 行木英生, 村上 泰, 川原夏子, 他: 特異な異物2症例. 日気食会報 24 : 53~58, 1973.
- 8) 若山 徹, 長谷川光俊, 大谷 晃: 特異な下咽頭・食道異物の2症例. 耳喉 46 : 65~67, 1974.
- 9) 内藤雅夫, 岩田重信, 西村忠郎, 他: 呼吸困難をきたした食道異物2症例. 日耳鼻 80 : 1513, 1977.
- 10) 田辺正博, 上原範子: 食道穿孔を合併した食道異物症例. 耳鼻臨床 73 : 673~677, 1980.
- 11) 樋口昌子, 大谷公直, 沢木修二: 最近年間の興味ある食道異物症例. 日気食会報 31 : 444~450, 1980.
- 12) 細沼秀生, 高山乙彦, 押尾良功, 他: 気道, 食道長期嵌入異物についての考察. 日気食会報 33 : 334~339, 1982.
- 13) 須藤直廣, 石部 司, 楊 光宗, 他: 5カ月半停留した幼児食道異物症例. 耳鼻臨床 75 : 2007~2010, 1982.
- 14) 加藤慎二, 木下治二, 伊藤博隆, 他: 希有な食道異物(乾燥剤袋)の1例. 日気食会報 35 : 143, 1984.

- 15) 狩野季代, 安達裕一郎, 井手 稔, 他: 宮崎医大および県立宮崎病院における気道・食道異物の臨床統計的観察. 日気食会報 **38**: 336~373, 1987.
- 16) 矢野原邦生, 山田弘之, 原田 泉: 陳旧性食道異物の一例. 耳鼻臨床 **81**: 115~118, 1988.
- 17) 児島高寛, 矢島靖巳, 岩谷周一, 他: 誤飲後年間放置され開胸除去しえた食道異物の1例. 日消外会誌 **22**: 2421~2424, 1989.
- 18) 松崎全成, 更級則夫, 山川浩治, 他: 当教室20年間の食道異物症例の統計的観察. 耳鼻臨床 補57: 246~249, 1992.

原稿受付: 平成8年3月8日
原稿採択: 平成8年6月12日
別刷請求先: 三島丈和
〒279 浦安市富岡2-1-1
順天堂大学医学部附属順天堂浦安病院耳鼻咽喉科